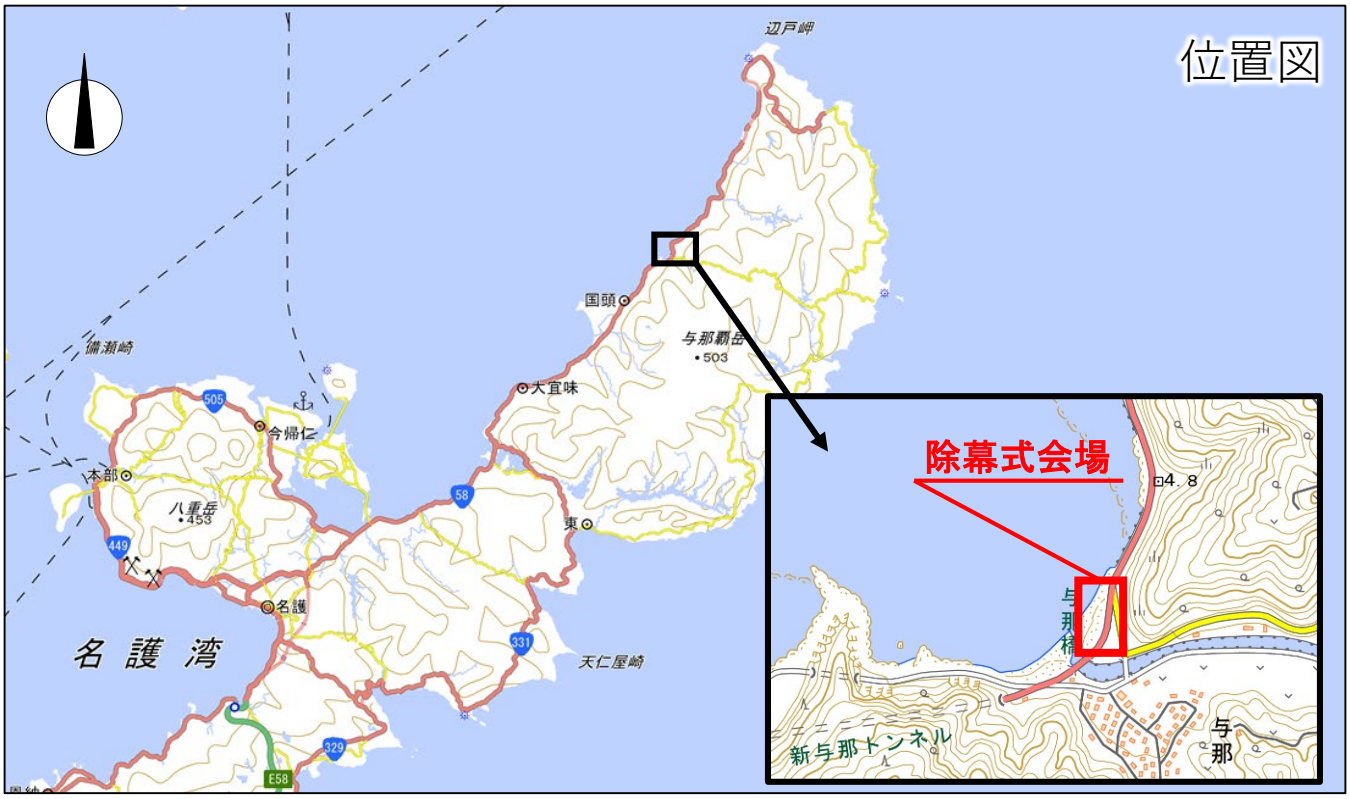
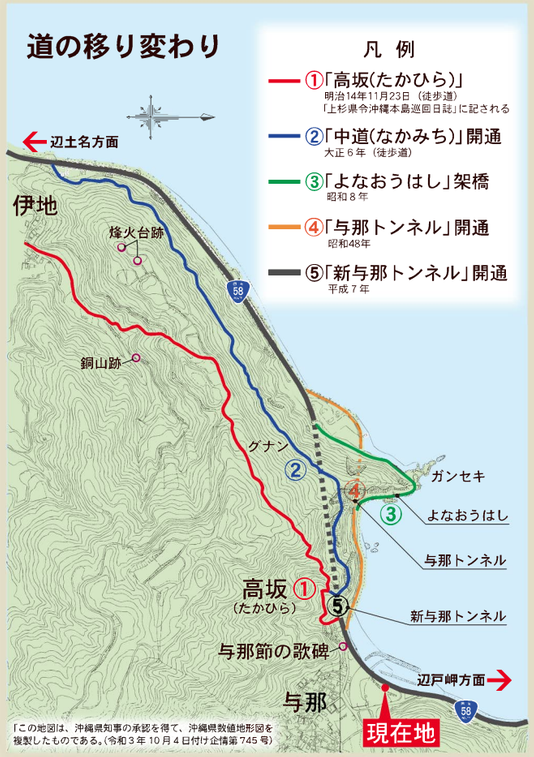
除幕式　会場位置図



看板設置写真

与那の道の移り変わり

内閣府 沖縄総合事務局 北部国道事務所 / 国頭村役場 / 与那区



国頭村与那集落は、山間の平坦地に形成された集落で、周囲は山が海に迫る典型的なやんばる集落の特徴を持ち、交通の難所となっていました。

明治14年、第二代沖縄県令のやんばる視察の際に記録した「上杉県令沖縄本島巡回日誌」にもその険しさが記されています。（※文末の「上杉県令沖縄本島巡回日誌より」の要約参照）

当時、隣の伊地集落とを結ぶ道は、獣道を踏み固めただけの険峻な坂道で、往来には困難をきたしていました。

この道は、琉球王国時代からの宿道で「高坂(たかひら)」と呼ばれ、大正の初期まで利用されており、その道の状況は琉歌の「与那節」にも詠まれています。

大正6年には「高坂」の海側、グナン原斜面中腹に近隣の青年によって新しく村道が造られ、その道は「中道（なかみち）」と呼ばれていました。しかし、道幅が狭く勾配が急で、荷馬車がやっと通れる程の道でした。

さらに昭和5年、沖縄県振興15箇年計画案に基づいて「辺土名」から「奥」間の県道工事が実施され、「グナン」及び「ガンセキ」を通る海岸側に昭和8年「よなおうはし」が架かり、車の通行が可能な県道が開通しました。ところが、岩石の崩落や高波により人や車が流されるなどの被害が多く出て改善が求められていました。

そのため、昭和48年に「与那トンネル」（延長159m）を含む道路が開通しました。そして昭和58年度から国道58号として国による道路管理が行なわれるようになりましたが、トンネルの前後は相変わらず大雨や台風などの時には、越波や土砂崩れなどの危険性があるため通行規制区間に指定されていました。

こうした問題の解消を図るため、防災事業として平成元年度より新たな道路整備が進められ、「新与那トンネル」（延長559m）を含む現在の道路が平成7年2月に開通しました。これにより安全性・利便性が向上し、地域の生活基盤を支える幹線道路として利用されています。

このように、当地域は明治・大正・昭和・平成に渡り5回も道が移り変わり、それぞれの道は、明治・大正期の徒歩道、昭和時代からの車道等、その時々の歴史や文化を映したものとなっています。道づくりに使用した機材も鍬やツルハシから発破、巨大建設機械へと変化したその移り変わりを通して、道が地域とともに歩んできた歴史を感じることができます。

※上杉県令沖縄本島巡回日誌より

明治14年11月23日の『上杉県令沖縄本島巡回日誌』で、伊地集落から与那集落へ向かう途中「山路愈上ル、七折尽テ又九折、･･･坂ヲ下ル、険悪奇峻山中ニ著圃アレハ、輙チ猪垣ヲ見ル、坂ヲ下リ尽シテ、衝門アリ」と記している。

（要約：山路を登るには、七つ曲がり尽くしてもまた九つ曲がる・・・　坂を下りながら、険しく急峻な山中に芋畑があり猪垣が囲んでいる、坂を下り尽くすと垣の門がある。）

琉歌　与那節【解説】
与那の急坂は汗を流して登るとても難儀な山道であるが、愛しい人と一緒なら一足ほどのものである。

「与那節」
与那の高ひらや
汗はてどのぼる
無蔵と二人なりば
一足なから

沖縄本土復帰50周年記念

周辺情報　English edition

サイズ：w1400×h1000